書　評　と　紹　介

伍賀偕子著

『敗戦直後を切り拓いた働く女性たち

――「勤労婦人聯盟」と「きらく会」の絆』

評者：谷合　佳代子

本書は，1946年にナショナルセンターの枠を超えて結成された「大阪勤労婦人聯盟」(以下，「勤婦連」）の５年間の活動と，女性労働運動家たちの生涯にわたる互助組織「きらく会」の歩みを，インタビューと文献調査によって掘り起こした貴重な記録である。

著者は1942年生まれ，総評大阪地評オルグとして長年大阪の女性労働運動を牽引し，総評解散後は連合大阪で政策スタッフとして定年まで執行委員を務めた。1977年に「関西女の労働問題研究会」を結成して事務局長に就任，のちに代表となり，2012年の解散までその任にあった。その経歴と業績において，本書はこれまでの女性労働運動と執筆活動の画期に位置するものといえよう。

これまでに何冊もの聞き書き本を上梓した著者にして，まだまだ書き足りない，どうしても今残しておかねばならない，という使命感が溢れた熱い本である。また，随所に用語解説が付されており，労働運動に不案内な読者にも理解できるように配慮されている。

本書は本論と付論の二部構成となっており，本論では戦後の女性労働運動を描き，付論では「労働組合婦人部をめぐる変遷」と題した大正時代から現在までの通史を概観している。

まず，目次は以下の通りである。

プロローグ

―女の職場は女が守る

Ⅰ　「勤婦連」の誕生とその準備過程

1　敗戦直後に結成された「大阪勤婦連」

2　敗戦と労働組合の結成

3　「勤婦連」の準備過程

4　全国的にもこのような横の連携はあったのか

Ⅱ　勤婦連の活動・歴史的役割と「労組婦人部」づくり

1　勤婦連の役員と事務所

2　勤婦連としての活動

3　勤婦連の果たした役割

4　大阪勤婦連の「解消」

Ⅲ　勤婦連を担った人々と切り拓いた婦人労働運動

1　関久子（尾崎邦）―勤婦連初代委員長のリーダーシップ

2　小林美代子―労働組合婦人部の原型を刻む

3　桂あや子―女の職場は女で守らなあかん

4　飯田好子―労働組合も仕事も定年まで一生懸命に

5　西川好子―婦人部づくりに全国を飛びまわる

6　永井美津―いつも勤婦連会場設定の裏方

Ⅳ　大阪総評婦人部運動への継承

1　しのびよる軍靴の足音に抗して

2　婦人部解体攻勢をのりこえて

V　シングルで生きぬく生涯の友の支えあい―「きらく会」と絆の継承
　1「きらく会」の結成と生涯の友の支えあい
　2「勤婦連」・「きらく会」の絆とその継承
付論「労働組合婦人部」をめぐる変遷

プロローグは，敗戦前日の1945年８月14日に行われた米軍の大阪砲兵工廠への空襲場面から始まる。当時，市バスの運転手をしていた桂あや子（24歳）が爆弾の降る中を無我夢中でバスを走らせた，その鬼気迫る状況描写に一気に引き込まれていく。戦時下の人員不足のために駆り出された女性たちは，戦後，男たちが復員すると職場を追われた。桂あや子は辞表を提出させられた悔しさをバネに，「女の職場は女が守る」という固い決意のもと，組合活動に奔走した。やがて桂は勤婦連二代目委員長に就くのだが，それは本論で述べられている。

このプロローグからもわかるように，本書は一般の読者を想定して，読みやすさを追求したものとなっている。そして，ここで著者は「どの労働組合史にも記述されておらず，桂あや子もすでに90歳を超え」（p.12）た今，記録を残すことへの渇望ともとれる思いを吐露している。

続いて，若干の感想を交えつつ各章の内容を紹介する。

Ⅰ　勤婦連は，1946年６月23日に１万２千名の会員によって結成された。当時，労組はイデオロギーの違いによって左派の産別会議（全日本産業別労働組合会議）と右派の総同盟（日本労働組合総同盟）とに大きく分かれ，中立組合として少数派の日労会議（日本労働組合会議）が存在していた。勤婦連はそれらナショナルセンターの枠を超えて結集した共同戦線である。さらに，労働婦人だけではなく家庭婦人も含めた組織にするために，「労働婦人」ではなく「勤労婦人」聯盟と名付けられた。

勤婦連の結成が上記３つのナショナルセンターの大阪地方組織の創立に先んじているのが特筆すべき点だ。しかも，全国的に見てもこのような組織は大阪にしか存在せず，極めてユニークな活動を展開したといえる。この点，筆者は大阪の勤婦連が全国で最も早く結成された，かつ唯一の組織であることを実証しようとかなりの資料を渉猟した模様だが，京都で類似組織が大阪より半年早く結成されていることを知った。ただし，京都での実態はほとんど解明されておらず，「京都と大阪の交流や比較は興味深いが，後日の調査に譲りたい」（p.28）としている。

Ⅱ　本書執筆にあたり，勤婦連の機関紙など一次資料が現存しないため，著者は相当に苦労して関係者からの聞き取りを重ねている。また，著者自身が編纂に携わった『次代を紡ぐ　聞き書き―働く女性の戦後史』（耕文社，1994年）や財団法人大阪社会運動協会（現・公益財団法人）が『大阪社会労働運動史』（有斐閣，1986年～，既刊９巻）第３巻刊行のために行った聞き取り調査などにも依拠している。

勤婦連は1951年頃に自然解消したもようだが，その経過も詳らかではない。わずか５年ほどしか存在しなかった勤婦連の意義とはなんだったのだろうか。勤婦連が掲げた要求・スローガンや取り組んだ運動を見てみよう。

・生理休暇，男女同一労働同一賃金，均等待遇を要求
・米の欠配対策など，食糧を求める運動
・国鉄婦人労働者首切り反対支援
・国際婦人デーの集いに市バスをチャーターし，ポスターを貼り巡らせて街頭宣伝
・演芸会の開催

特に一点目の，現在にも引き継がれているスローガンをこの当時から掲げている先進性に注目したい。逆に言えば，戦後70年を迎えようとする2015年の今でもこれらのスローガンが有効であることに，評者は歯がゆさを感じてしまう。

著者は，勤婦連の果たした役割を以下のようにまとめている。

①家庭婦人を中心とした婦人団体との幅広い共同戦線であった。

②戦後初めての「婦人部づくり」という，どこにも教科書のない未知の課題に挑む婦人たちの学びと交流，励まし合いの場であった。

③ナショナルセンター，産業，企業を超えた婦人部結成をよびかける，横断的な組織であったこと。このような組織は現在も存在しない，画期的なものである。

④松本員枝らが主催した理論的学習「近代女性講座」が，働く婦人にとって大きな役割を果たした。

勤婦連が共産党への反発から自然解消のような形をとったあと，そこで培われた女性たちの連帯は1951年に結成された大阪総評（日本労働組合総評議会大阪地方評議会）の婦人部へと受け継がれていく。彼女たちの闘志は決して雲散霧消したわけではなく，総評婦人部として再び培われていくのである。

Ⅲ　この章では勤婦連を担った６名の信念や活動歴が一人ずつ紹介される。

大阪教育労働組合の初代婦人部長である関久子は，組合の結成大会で「同一労働同一賃金」のスローガンを採択させた。彼女は勤婦連初代委員長であり，共産党の横やりで勤婦連が解消させられた際には激しい憤りを感じた。

小林美代子は日本生命労組の専従であり，1946年４月の争議は「サラリーマン争議」「オフィスガール初の争議」としてマスメディアでも取り上げられた。

桂あや子はプロローグでも紹介されているように，気丈な女性である。1945年11月に結成された大阪市交通局員の組合である「大阪交通労働組合」（大交）の専従となった。

阪急労組出身の飯田好子は桂あや子から引き継いで勤婦連の第３代委員長となり，解散までその任にあった。飯田好子は敗戦直後の急激なインフレ状況に対応すべく「結婚資金」を会社に要求し，勝ちとるという実績を残している。その後も定年まで労組役員として活躍した。

西川好子は高田アルミ労組婦人部長として活躍し，上部団体の日本労働組合会議の婦人部長でもあったために全国を飛び回ったという。大阪勤婦連の大会や集会には警官やGHQの監視が常にあり，弾圧を受けたことを証言している。

これら華々しい活躍をした幹部とは異なり，最後に紹介されている永井美津は朝日新聞労組の専従書記として裏方の仕事に徹していた。勤婦連の会議は毎回，朝日新聞社の会議室を無料で借りて開催され，その世話をしたのが永井である。

６人の中で最も印象的なのが桂あや子の次の言葉だ。

「『女の職場を守る』ということは，婦人自身の教養や地位を高めて，誇りをもてるようにしないといかん，なんでも『くれ！ くれ！』の組合運動はあかんという信念で，学習活動に力を入れ，堂々と自己主張ができるように，『婦人部弁論大会』の回を重ねた」（p.60）

自立した労働者としての誇りのために，という信念の気高さに胸打たれる。

Ⅳ　1950年７月に創立された総評（日本労働組合総評議会）の地方組織として大阪地評が結成されたのは51年２月。大阪総評婦人対策

協議会の結成は51年11月のことであり，53年７月に婦人部となった。勤婦連で活躍した西川好子，飯田好子らが幹部を務めた。

Ⅴ　勤婦連時代からの女性労組幹部のつながりによって互助組織「きらく会」が作られたことが述べられている。「結婚適齢期」に男たちを戦争にとられ，多くの女性が非婚のまま生涯を送ることになった時代，彼女たちは互いの老後を支え合うための組織を作った。会員は独身女性に限るとされた「きらく会」（お気楽に，という意味を込めて桂あや子終身会長が命名）は1956年２月に誕生した。結成当初の会員数は30人ほどで，1964年には半分になり，最後は５人になって2010年に解散した。

上野千鶴子著『おひとりさまの老後』（2007年）が話題となる50年以上前に，労働運動を通じて支え合いの精神を築いた女たちがいたことに驚く。

彼女たちは最後まで絆を結び，老後を支え合って互いに介護した。その絆はたとえ会が解散しても，なお次世代へと引き継がれている。それが著者たちが作った「関西女の労働問題研究会」であり，さらにその解散後は「フォーラム労働・社会政策・ジェンダー」が学び合いの場を繋いでいる。著者は高らかに言う。

「次代を切り拓いてきた人たちの活動が点としてでなく，線として面としてつながっていることが，私たち大阪のはたらく女たちの誇りとするところである」(p.90)

最後の「付論」は，「労組婦人部」という日本独特の組織形態について述べた，大正時代から現在に至る通史として初の試みである。大正時代の総同盟（日本労働総同盟）と，総同盟から分裂した左派組合である評議会（日本労働組合評議会）の婦人部活動について述べられている。敗戦直後については，左派の産別会議関西地方会議と右派の総同盟大阪連合会の婦人部方針などについて資料が紹介されている。GHQの弾圧に抗して婦人部を守り抜いた高田なほ子がアメリカ軍人相手に啖呵を切った場面など，胸がすく思いがする。

まとめにあたる「そしていま，これから」では格差が広がる現状への著者の危機感が語られ，労働運動を変革するために女性が果たす役割について，力強いエールが送られている。

付論全体はまだ研究ノートといった感がぬぐえないが，「ライフワークとして今後いっそう[研究を]深めたい」（「あとがき」）との著者の決意に大いに期待する。

2014年９月，本書の読書会がエル・ライブラリーを会場に開催された。主催は「全日本おばちゃん党」というFacebook上のグループであり，参加者は大阪の中年女性たち13人。ほとんどが労組と縁のない人々であり，にもかかわらず大変熱心に読書会に臨んだ。「組合の組織系統図がないとわからない」「組合の名前に覚えがなく，さっぱりわからない」という人が多くいたが，それでも「知らないことばかりで感動した」「女たちが自分の力で道を切り拓こうとしたことに感動する」という声が多く寄せられた。「このころの労組の組織率は50パーセントを超えているのに，なんで今は労組が嫌われているのか」という疑問も寄せられた。その疑問への答えは本書の中に見出すことができる。女たちの自主的な闘いを上からつぶそうとした政党や労組幹部たちの強圧的な存在は，今に続く組合凋落の一因となったのではないか。

さて，本書の意義は，これまで顧みられることのなかった女たちの闘いを長い年月をかけて地道に掘り起こしたことである。労働組合の活

動にとどまらず，勤婦連を担った人々が脈々と友情をつなぎ温め合い，生涯にわたって互助の精神を培ったということが何よりも感動的だ。しかも，彼女たちは20代半ばの若さで困難に立ち向かったのである。これからの時代を生きる若者たちにも大きな励ましとなるだろう。

とはいえ，本書は実に濃い内容を120頁という短さにまとめたために，資料不足の点も否めない。最も残念なことは勤婦連の機関紙や議案書などの存否が確認できていないことだ。占領下の労働運動を研究するにあたってGHQの資料を調査していないのは悔やまれる。それらの中に組合機関紙が残っている可能性が捨てきれないからだ。たとえば中北浩爾著『日本労働政治の国際関係史1945–1964』（岩波書店，2008年）に豊富に引用されている米国側資料の中や国立国会図書館所蔵のマイクロフィルム中に勤婦連関係資料も含まれているかもしれない。これは若い研究者のために残された課題といえるだろう。

内容ではなく記述表現についてのことになるが，本書には典拠が判然としない記述がまま見られる。

また初学者にわかりやすいようにと配慮してあるにもかかわらず，細部でその原則が崩れる箇所がいくつかあるのが惜しまれる。たとえば，「婦人部の二重権力論」という用語が解説なく２度登場するが，初学者にはなんのことかわからない。せっかく巻末近いp.105に解説があるのでそこを参照せよとの指示があればよりわかりやすかっただろう。解説が必要ではないかと思われる用語に解説が付されていないこともあり，どの語に解説をつけるのか，その要否の基準が不明だ。上記の読書会で「難しすぎてわからなかった」という声が聞かれたのも，この解説の採用基準が影響しているのかもしれない。

もうひとつ，疑問の残る点を挙げておく。「勤婦連の果たした役割」として「近代女性講座」が取り上げられているが，この主催者は「関西自由懇話会」であり，勤婦連の人々は参加者にすぎないのではないか（p.39）。「勤婦連の果たした役割」ではなく，勤婦連に影響を与えたもの，として別建てで書かれているほうがわかりやすいと思う。

これらの瑕疵は些細なことであり，揚げ足とりのようで恐縮だが，編集の段階で容易に修正・調整が可能であったと思われるので，著者のすぐ近くにいながら編集の手伝いができなかった評者自身が申し訳なく思う。

しかし，どの労働組合史にも記述されていない歴史に光を当てた著者の努力と成果は大いに評価されるべきである。未踏の大地にまず著者が鍬を入れた。これまで誰も描いてこなかった敗戦直後の女性労働者たちの労苦を著者が掘り起し，次世代に伝えることを使命とした。本書を読んでこの使命に共感し，次に続く若き女性研究者が現れることを切に願う。

（伍賀偕子著『敗戦直後を切り拓いた働く女性たち―「勤労婦人聯盟」と「きらく会」の絆』ドメス出版，2014年６月，120頁，定価1,250円＋税）

（たにあい・かよこ　エル・ライブラリー（大阪産業労働資料館）館長）